



Title	結核業務の今昔 : 終戦から30年までの思い出
Author(s)	宝来, 善次
Citation	大阪公衆衛生. 1967, 19, p. 2-4
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84414
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

今昔物語

平安時代の末期、宇治大納言、源隆国によって書かれたといわれる「今昔物語」は、「今は昔」という書き出しではじまっている。

今は昔、大阪の町々に軍靴がひびき、空襲警報のサイレンが囁りわたっていた頃から、黙々と、働き、敗戦後の混乱のなかでも、市民の健康を守りつづけてきた人たちがいる。いま、この人たちの来た道をふりかえって、その歩みをみつめてみるのも決して無駄ではない。

この号では、結核予防、保健婦業務、監視業務について、3人の方々に、今昔物語の昔の部をお願いし、今の部として、新進の3人の方々に、今抱えている問題や悩みを書いていただきました。

古人曰く「温故知新」と……

結核業務の今昔

終戦から30年までの思い出

宝 来 善 次

・はじめに

筆者は国民病として知られた結核学を専攻しようとして、恩師大阪大学今村名哲教授の門下に入局した。口支事変から大東亜戦争と困難な時代の中であって、陸軍軍医として、大阪府衛生技官として、大阪大学医学部、微生物病研究所の教官、研究員として活躍しながら結核の諸問題を眺めてきた。昭和23年8月には戦争が終ったが、終戦直後の混乱状態は筆舌に尽せないものであった。わたくしども医学の道に志してきたものの多くのものは、国民の健康保持、疾病予防、疾病治療にひたむきになって努力したものであった。そのうちでも結核問題は多くの専門家によっていかに解決すべきかに関し尽力された。筆者もそのうちの一人として働いてきたので、昭和23年～30年の10年の間の結核に関する事柄を思い出して記述し、これにつづく10年の事柄をお書き下さる方につなぐことにする。

・10年の間の結核死亡

昭和19年から21年の3年間の結核死亡の正確な統計は出されていないが、人口10万人対、昭和19年237.4、23年280.3、21年261.1が推定された。昭和13年190.8、昭和15年214.1であったことから終戦直後には、結核死亡が増加したことが認められる。昭和22年以降には

統計が正確になった。昭和22年181.2、24年163.3、26年110.3、28年66.5、30年52.4となって、昭和26年には結核死亡半減の祝賀会が全国的に展開された。昭和33年には戦前、戦時中の $\frac{1}{4}$ という喜ばしい傾向を示した。このような減少の原因はいろいろ考えられるが、結果からみると青年層の結核死亡の高い山が削られたことであった。すなわち、20～24才における結核死亡は、昭和19年人口10万人対467.9、15年571.6、22年424.0、26年158.7、30年43.5と減少して、昭和30年には全年令の平均死亡を下まわるようになった。この10年の間の後半には結核死亡を減少させる各種の要因があったことになる。その一つには社会状況の転換がある。なかんずく、旧軍隊の解消は結核を少なくしている。結核行政が円滑に進められてきたことであり、結核学に精進するものの研究、予防、治療に力が結集されたことであった。特筆することは結核予防法の改正により、BCG予防接種が広範囲に施行され、抗結核薬の出現による結核医療基準の制定とその実施にあったものと考えられる。

・10年の間の結核罹患

戦前、戦時中、終戦直後と永年を通じて結核罹患の実際数は明らかにされていない。多くの結核学研究者は死亡数の約10倍の罹患率があるであろうと想像されていた。ところが昭和26年には結核死亡が半減したが、20数万の結核ベットの満床であり、自宅治療を行なっている患者が入院治療患者の10倍にも及んでいるというような状態が、一般に認識されるようになった。ここにおいて、昭和28年厚生省は結核予防会を中心にして全国の結核専攻者を動員して、結核実態調査を実施することになった。北は北海道から南は鹿児島までの厚生行政地域のうえから各種産業、階級を含

む全国の縮図を作り、保健所単位に結核検診と調査が行なわれた。その結果、要医療結核患者 292 万人、要注意結核発病のおそれある者 218 万人、治癒所見者 847 万人という数字が公表された。要医療者の多い数字に多くの人が驚かされた。

したがって結核死亡が減少したとはいえ罹患者の数の多いことから結核はなお社会にいかにも多くの害を与える疾患であるかが再認識された。幸いストレプトマイシンの登場についてパス、チビオン、イソニアジットの抗結核薬の開発で、これら薬剤の基礎的研究ならびに臨床的応用に研究がくりひろげられ、結核死亡者の一層の減少と要医療罹患の大巾な減少に大きい力が注がれるようになった。

・10年の間の結核感染

結核は感染症であり、伝染病であることは古くから知られていたが、慢性経過の疾患であるために感染の時期のわかりにくい場合が多い。国民全般の結核感染の状態はどうであるかは疫学研究者ならびに特殊な研究者以外にはわかっていない。戦時中に今村教授が少青年層の結核感染の状態を大阪市と奈良県において調査した成績がある。ツ反応陽性率は大阪市においては、小学1年30.0%，6年55%，中学5年70%，奈良県においては、小学1年10%，6年30%，中学5年50%であり、大阪市と奈良県の少青年層の間には結核感染率に開きのあることが知られていた。終戦直後筆者が同じく大阪市と奈良県のツ反応陽性率を調べたが、大阪市においては戦時中の成績と大差なかったが、奈良県においては小学1年は10%と差がなかったが、小学6年40%，高校3年60%と戦時中に比しツ反応陽性率が高くなっている傾向がうかがわれた。これは農村においても戦後感染機会が増加していることが示されているものである。

昭和24年からBCG接種が普及して昭和25年以降は各地において小学2年以上にあっては、BCG接種が加わったためツ反応陽性率が70%以上も示すようになり、特殊な地区を除いてはツ反応による結核の自然感染率は推定できなくなった。一方都市においてはBCG接種の影響がなくともツ反応陽性率は、年令20才以上になると80%以上を示しているようであり、わが国ではなお結核感染機会の多いことを示すものである。アメリカの結核感染率の低いことに較べると、大いに注意せねばならないことと思われる。

・10年の間の結核のその他の問題

この10年の間に筆者の脳裡に深く残っているものについては次のようなものがある。結核治療の面では、久しく待望していた抗結核薬が登場したことである。

ワックスマンの研究によるストレプトマイシンの登場は結核患者に大いに福音をもたらせた。ついで登場したパス、チビオンも結核治療を力強くしてくれた。さらにイソニアジットの登場によって結核治療の完璧が期せられるような感じを持った。また、麻酔学の発達と外科治療の進歩は結核患者の社会復帰の希望を大きくしたようである。これらの新しい研究が結核予防法結核医療基準のうちに折り込まれて広く活用されるようになった。さらに研究がつづけられ次の10年に成果が期待されるようになった。

結核予防の面では、BCG乾燥ワクチンの完成と予防接種法および結核予防法の改正による法律的措置から、全国民の結核未感染者に対するBCG予防接種の普及である。昭和24年以降年間1000万人以上に及ぶBCG接種から、結核発病を著明に減少させたようである。このBCG接種のための保健所の活動は大いに称賛される。また、厚生省を中心とした各種の行政機関が結核予防にあらゆる努力を払った時代でもあったように思われる。

なお、結核研究に関する学会活動もこの10年後半においては大きい盛りあがりが見られた。年1回定期的に開催される日本結核病学会においては、結核の疫学的研究、結核菌、アレルギーおよび免疫の研究、病態生理に関する研究、抗結核薬の基礎的研究および臨床的研究、外科的治療の研究などあらゆる分野における新しい研究が数多く公表されたのも印象的であった。また、各地区において日本結核病学会地方会が開かれ、基礎的研究者および臨床家が相携えて活発に討議が持たれ、将来のわが国の結核問題を考えていた

執筆をお願いした方

結核予防

奈良医大第2内科 教授	宝来 善次
結核予防会大阪府支部	西窪 敏文

保健婦業務

大阪市衛生局保健管理課	石田 吉子
大阪府守口保健所	杉本 智子

監視業務

大阪府布施保健所	中橋 清助
大阪市北保健所	加藤 裕三

戦中戦後

大阪市立衛生研究所長	中山 信正
------------	-------

むかし 結核

姿も頼もしく思われた。このようなことから過去何10年間も国民を苦しめた結核症も発病予防できるものであり、治癒させることの可能なものであるという認識が一般に持たれるようになった。

・むすび

限られた紙数で結核業務の今昔として終戦からの10年、すなわち、昭和20年から30年の間の思い出を記述した。終戦までのわが国の結核の状態を知っている筆

者であるので、まず、結核死亡、罹患、感染という3つの基本的なことを思い出した。この10年の間に特筆されることは抗結核薬とBCG乾燥ワクチンである。次の10年の思い出をお書き下さる方と内容を異にすると思われるが、わが国の現状から結核撲滅にはなお一定の期間が必要であろう。ここに考えさせられることが2, 3ある。抗結核薬の出現は結核治療を容易に考えさせること、結核専攻の研究者が激減したこと、若い医学者が結核病学に対する興味を持つ人が少なくなったことなどが、筆者の心の奥に残っている寂しい思いである。